

……立案・実行・それから……

—日本横断航行—

渡部里美

日本列島を横断するという考えが浮んだのは一年前の事であった。そのころ私はコロラド河航行という初めての海外遠征を控えて忙しい毎日を送っていた。

そして、激流航行を目指すポート班には一年生3名二年生2名そして三年の私の6名が存在し、そしてコロラド遠征はOB2名を含め、上級生3名の5名で編成されており、期間は夏休みの全期間であった。故に一年生の3名は居残り組となり、夏合宿は他のOBに応援してもらい保津川にてトレーニングすることになった。その当時ポート班のリーダーは私が任されており、私自身責任を感じざるを得なかった。そして私に出来ることは彼ら一年生に夢を持たせることであった。

その一つが今夏なした日本横断航行であった。だからと云ってこの計画が無理に(一年生をクラブに引き止める為に)作られたものと誤解してもらっては困る。

この計画はむしろ必然的に生まれたものと思ってほしい。なぜなら我々関大探検部ポート班は、今まで日本における激流航行技術の完成を目指し、日本国内の激流急流を征服し続けてきた。

1970年には日本最大激流の黒部川の上ノ廊下、下ノ廊下の初完全航行に成功し、名実ともに日本一の座をゆるぎないものにした。もちろん日本一と云うことがこと探検に関してはさほど意味のあるものではないと思うが、航行技術があると云うことは、それだけ探検に可能性をもたらしことに違いないと確信する。

そして昨年のコロラド河遠征の成功によって、世界レベルになりえたと云えよう。この時点で我々のこれから行なってゆくべきことは世界の激流を目指すことはもちろん、河川を広くとらえた探検活動に必然的に移行するのではなかろうか。日本に下るべき激流が決してなくなったとは言わないが、少なくなってきている現状で、ましてや一般にも川下りが浸透しつつありスポーツ化されつつある現在、バイオアワークを志す探検部がいつまでも同じことを志向してはいけないうと思う。もちろんこれは志向上の問題であって、トレーニングとしてフィールドを選択する際には同じ川を対象として選んでもかまわない。むしろその方が技術の向上を把握するには容易であろうと思う。

そのことは我が部において保津川をトレーニングの場としてまた、四国吉野川を一年生の技術の仕上げとして選んできたことが示していると思う。これからもこのパターンは変わらないであろう。

今回の日本横断航行は河川を広くとらえた活動と云えるのではないだろうか。そしてこの活動の成功は我が関大探検部の一連のトレーニング活動が決して誤りではないと裏づけることになったような気がする。

合宿に関して云うならば私は他の6名のメンバーに感謝している。特に二年生の西口君、大嶋君にはよく一年間耐えてくれたと思っている。昨年、何も指導できずじまいだったし、冬合宿は完全な失敗であったにもかかわらず頑張ってくれて、今回は合宿の中核として多大な努力をしてくれたと思う。また、吉野君にはリーダーという大任をまかせ種々の苦勞をかけてしまったし、野村君は足を五針も縫うという怪我にもかかわらず後半参加してくれた。

一年生もこのようなハード合宿によくついてくれたと思っている。今後ともこのすばらしいチームワークを忘れずに新たなフィールドに探検と云う名の鋭い矢を打ち続けて行きたいと思う。

今、私は関大探検部の名の下に自分の企画した活動を完全になしえた事に限りない満足を感じている。